

## [論 文]

## 教養科目フランス語の課題と方向性 —付加価値の高い授業を目指して—

### The Issues and Direction of Teaching French as a Second Foreign Language —Aiming for a Highly Value-Added Class—

清 水 まさ志\*

#### 要旨

大学において英語学習の偏重が強まるなか、第二外国語学習の存在意義が問われている。日本の価値観は、「実質的価値」+「付加価値」で成立しており、この「付加価値」は付け足しではなく、「実質的価値」の存続を促す役割である。英語学習を「実質的価値」と見なし第二外国語学習を「付加価値」と見なすとき、第二外国語学習は英語学習を妨げるどころか、それを有効に促すことができる。その役割をフランス語が果たす可能性は大きい。

**キーワード：**フランス語教育／英語学習偏重／日本の価値観

#### はじめに

筆者は、非常勤講師として北陸学院大学と富山大学において一般教養科目フランス語を担当している。対象となる学生は、人間総合学部、コミュニティ文化学科、経済学部、理工学部、芸術文化学部といった幅広い学部、学科に属し、選択科目としてフランス語を半期、あるいは一年間履修する。専門科目と関わりなく、しかも英語学習が優先される風潮のなかで、第二外国語フランス語は、学生からすれば単位修得に必要でも優先順位の低い科目とみなされる傾向が高い。

筆者の専門は本来フランス文学であるが、主にフランス語を学生に教えている以上、こうした教養科目フランス語の現状を考え、その存在意義と方向性を日本の価値観における「付加価値」という観点から探っていきたい。それは同時に、大学における教養の意義を考えることでもある。必要不可欠ではないかもしれないが、それゆえにこそ何らかの「付加価値」をもたらし、さらに人生のなかで精神的な豊かさを生むものとして、フラン

ス語学習と教養の価値は非常に似たものだと考えられるからである。

#### I 教養科目フランス語の現状

筆者は非常勤講師ゆえ、基本的にカリキュラムの編成や学内改革に関わることはない。ただFD研修会といった機会に、そうした議論を聞くようにしている。例えば、富山大学は教養教育科目の整備と充実に取り組んでいるが、こうした流れは全国的であるといっていいたいだろう。外国語に関していえば、第一外国語である英語の実践的かつ有効な学習カリキュラムの構築が何よりも優先的目標とされ、フランス語は、ドイツ語、ロシア語、中国語、朝鮮語と肩を並べ、選択的な第二外国語に振り分けられている。全国的に見ても、大学において第二外国語が必修科目でなくなって以来、さらに国際・経済情勢などの変化により、中国語、朝鮮語といったアジア言語のニーズが高まるなか、ドイツ語やフランス語といった西欧語学習は衰退の一途をたどっている。しかし富山大学といった地方の国立大学では旧来の体制がいまだ維持されているため、ドイツ語は、フランス語よりも教員数も履修者も多いのが現状である。北陸学院大学

では中国語と韓国語と並び、フランス語は英語に次いで唯一残った西欧語の位置を与えられている。英語学習を最優先する方向性において、大学の外国語学習＝英語＋ $\alpha$ （付加価値）という方程式で考えられているであろう。それゆえ教養科目フランス語の位置および価値はひとえに＋ $\alpha$ で表される付加価値といえるのではないだろうか。そして近年、英語に次いでこの＋ $\alpha$ に当たる第二外国語を選択するさいに、実用性を重んじる学生は経済情勢を鑑みて中国語を選択し、身近なアジアの国であり近年文化的にも注目を集める韓国に関心のある学生は韓国語を選択しているだろう。その点でフランス語の位置は実用性において韓国語に勝るものの中国語には及ばず、女性の関心が高いながら身近ではないというハンデで韓国語に一步先んじられていると感じられる。ただ今後、近隣アジア諸国と日本の関係の変化が、どのように学生の第二外国語学習に変化を及ぼすのか、今のところ未知数である。

#### II 英語学習中心主義の中でのフランス語

外国語教育において、もはや英語教育の最優先は揺るがない。小学校において英語が必修となり、大学においても実践的教育を目指す以上、その流れを頭から否定したり拒否してかかることは無理がある。わが国における英語学習中心主義が国際的に見て例外的であり<sup>1</sup>、さらに国内の英語教育あるいは国際文化史関係者からもそれに対する危機感は叫ばれている<sup>2</sup>。にもかかわらずそれにブレーキをかける大きな要因は今のところ見つからない。あくまで日本語を国語と定める以上、日本人の英語力を少なくとも国際的に通じるレベルにしたいという論理を崩すことは難しい。ただ英語学習を先決課題にしてしまう最大のデメリットは、英語をあたかもオールマイティーカードのように見なし、その他の言語を学ぶ努力も機会も共に失われていくことにある。学習者の立場でいえば、英語にさんざん悩まされてきたのだから、これ以上面倒な言語学習はしたくないという気持ちに傾くことである。それゆえ第二外国語フランス語に関していえば、英語学習を中心に据える形で、あるいは第二外国語学習は英語学習を助けるという方向性で、その学習の存在意義を考えていくこと

が必要ではないだろうか。

大学の外国語教育の最大の長所は、それまで習う機会がなかった外国語を自ら選択し、学ぶ機会を得られることにあったと考えられるだろう。言葉の学習を通して、今までにない新しい知識や物の見方を獲得できる点にあった。それはまさに教養の名に値するものであった。フランス語は18世紀から20世紀の初頭まで、ヨーロッパ社会の教養語であり国際的な外交語として、英語を凌ぐ地位にあった<sup>3</sup>。このフランス語の歴史的・文化的背景は、事実上今もフランス語学習者の選択理由の大きな要因をなしている。フランス語を始めた学生が、2012年のロンドンオリンピックにおいて、英語と同時にフランス語がアナウンスされていることに驚いたと感想をもらった。英語が国際共通語であるという意識が強まった現在、オリンピックの第一公用語はフランス語であること自体奇異に感じてしまうらしい。英語に唯一匹敵できる国際語としてのフランス語の印象も、現在のわが国では感じられないだろう。滞米経験をもとに小説を描く水村美苗は『日本語が滅びるとき』において、アメリカに移住したときなぜフランス語フランス文学を専攻したのか、その理由をこう述べている。「思えばフランス語とは、そんな[英語・アメリカ人にコンプレクスを抱く＝筆者註] 私が、少しでもアメリカ人の優位に立つのはうってつけの言葉だったのである。フランス語とは、世界の言葉の中で、唯一英語と拮抗することができた言葉—拮抗することができたのみならず、唯一優位に立ちうる言葉であった」<sup>4</sup> 90年代以降、国際社会でどんどん薄れていくフランス語の地位にあっても、この感覚は非英語圏の国民にとって単にスノビズムと一蹴することのできない感覚を語っている。そこには英語に対してフランス語が持つ＋ $\alpha$ が端的に語られていると感じられるからだ。

教養科目フランス語の課題と方向性は、現状においては、英語学習中心主義のなかでフランス語がどのような＋ $\alpha$ を与えられるのかという点に尽きるのではないだろうか。学生がフランス語を履修する動機は、前述のようにフランス語の歴史的・文化的背景に基づき、大きく分けて二つある。ひとつは、実用性の観点からフランス語が英語に次

\* SHIMIZU, Masashi  
非常勤講師 フランス語

ぐ国際語であり、英語の次に学習すべき言語という位置づけである。あるフランス語科の専任教員が、二次次にフランス語科に学生を勧誘するさい、次のように問いかけると筆者に話してくれた。「英語しかできない学生になりますか、それとももうひとつ国際語を話せる学生になりますか」これは英語ができることが普通になってしまったとき、それではどうやって人と差別化し、自らの $\alpha$ を売りにするのかという意識を先取りするものだろう。英語学習が先決であるからこそ、それだけでは足りないのではないかという心理を突く作戦である。この場合、話者数で圧倒するものの中語は事実上まだ国際語でない以上、フランス語に一分の有利さがある。しかし第二の国際語としてのフランス語は、言語に関心のある女子学生や国際社会に関心のある男子学生の動機づけに有効ではあっても、半年あるいは一年、専門と関係のない選択科目として履修する学生の場合、有効な動機付けとなり得ないだろう。

もうひとつは、言語そのものというより文化的関心に困っている。フランスは、経済的な側面より、料理、パン、お菓子、ワイン、服飾モード、歴史的建造物とインテリア、絵画、彫刻、文学、映画、といった文化的・芸術的側面で今もわが国で人気がある。書店で女性ファッション誌を手にとれば、パリ特集が定番の旅行特集のひとつであることは今も昔も変わらない。ただフランスとパリのイメージは、それぞれの時代背景によって変化しているのも確かだ。戦前および戦後の経済成長期においては、パリ＝芸術・文化の中心地というイメージで語られていた。そしてバブル期から前世紀末の大量消費時代においては、パリ＝高級品の象徴として扱われていた。しかし今世紀に入り日本の経済発展が終わり社会的にも成熟した時代において、フランス＝豊かな生活の象徴として語られるようになっていく。パリ特集で取り上げられるのは、高級レストランではなく気軽に楽しめるビストロ、高級ブランド品ではなくパリ流なシックな着こなし方、新品が並んだインテリアではなくパリの蚤の市で見つけたようなレトロでかわいい雑貨が飾られたインテリアである。フランス語の不人気に反して、フランスとパリは今も女性にとって絶大な人気を誇っているといっている

だろう。こうした人気は、物質的豊かさから質的豊かさを求める現在のライフスタイルとあいまって今後も続いて行くと考えられる。しかしパリとフランス文化によるアピールは、基本的に女子学生にとって有効であっても男子学生にとって有効とは言い難い。さらに文化的話題は好きでも語学学習は嫌いという学生はフランス語学習を途中で断念してしまいがちである。いずれにせよ、履修学生の履修動機は以上のどちらかに傾く。この二点が、英語学習中心主義のなかでフランス語がもたらす $\alpha$ とあっていいのではないだろうか。

英語学習中心主義は、外国語として英語をオールマイティーカードと見なす傾向に陥りやすい。グローバル化が進むなかで、英語を使えば単に英語を母国語とする人々とコミュニケーションを取ることができるだけでなく、英語を学習する全世界の人々とコミュニケーションを取ることができるという考え方は、その当否は別として大変魅力的である。これは英語を英語圏の「国語」とみなす考え方から世界の「共通語」とみなす考え方に移行するものであり、この「国語」か「共通語」かの問題は次項で検討する。

現在のフランス語教育も、フランス語をフランス共和国の「国語」というより、フランス語圏の「共通語」、さらにフランス語学習者の「共通語」と見なす観点が主流になってきているといっているだろう。この観点の理論的・制度的規範をもたらしたのが、EUヨーロッパ連合の言語政策であり、それをまとめた『ヨーロッパ言語共通参照枠』（ヨーロッパ評議会、2001年）である。複数の外国語を学ぶことを奨励し、外国語の習得に関してもネイティブを特権化することなく、必要に応じた部分的な学習で構わないという実践的な言語教育政策である<sup>5</sup>。筆者が、2006年夏、一か月間フランス現地で各国のフランス語教員と共にフランス語教員研修<sup>6</sup>に参加したさいも、この政策が研修の中心に据えられていた。日本のフランス語教員もこの国際的基準に則ったフランス語教育を目指すようになってきているが、現在のユーロ圏の経済危機とあいまって、この言語政策の実現の難しさも露呈していると感じられる。中央の大きな大学やフランス語学科を要する学部ならばともかく、地方で半年、せいぜい一年間のフランス語学

習しかカリキュラムに組み込まれていない場合、こうした理想を実現させることは困難だと言わざるを得ない。まずもって科目を潰さないように履修者を募り増やすことの方が先決問題になってしまっている。第二外国語フランス語の命運は、やはり日本の状況と日本人の価値観に応じた対策を立てることにかかっているのではないだろうか。

教養科目フランス語が縮小消滅しても、フランス語を専門的に学びたいという学生が消えるわけではなく、フランス語フランス文学科でフランス語のエリートを養成すればそれで十分だという意見は、実用主義の観点からみればある程度論拠があるだろう。実用性の薄い外国語学習に時間を割くより、もっと実用的な科目履修に力を注いでいく方がいいのではないか、こうした考え方は就職難を背景にますます高まるだろう。全国的にフランス語の履修者は減少していると言われている。当然、専任教員のポストも少なくなり、筆者のようにフランスにおいて博士号を取得しても非常勤のみで生計を立てなければならぬケースも稀ではなくなってきている。専任教員を置ける場合にはその人にできる限りフランス語科目を担当してもらい、専任教員を置けない場合は非常勤で少ないコマ数をまかなう、こうした路線のいずれもフランス語教育の将来を暗いものにするだけである。筆者は、フランス語を一部の人々の専有物にしないためにも、基本的に学習者を増やす方向で努力している。そして日々学生と接するなかで、学生は必ずしも実利的観点のみで、科目選択を行うわけではないと痛感している。

### Ⅲ 実用性第一の落とし穴

2011年9月に開催された富山大学教養教育FD研修会で、学生アンケートで高評価を得た英語教員の実践報告があった。その際に場内から質問が出た。現在の一般英語教育は、英語を英語圏の「国語」として教えているのか、それとも全世界の「共通語」として教えているのか？ この質問に対して担当教員は明確な回答を与えられなかった。この質問は現在の英語教育の問題点を明らかにしていると感じられた。これまでの英語教育は、英語を英語圏の「国語」として教えてきたと思われる。その最たるものがネイティブ至上主義であ

ろう。英語学習の理想がネイティブに近づくことであるとすれば、その言語教育は「国語」的発想である。しかし英語を「共通語」と考えた場合、英語圏の人々とコミュニケーションを取る以上に、非英語圏の人々と英語を介してコミュニケーションを取ることが重要となってくる。非英語圏の国民同士の英語は必ずしもネイティブ並みの必要性はない。極論すれば、ネイティブの英語が正統という意識も必要ではない。英語の微妙なニュアンスは母国語の人にしかわからないかもしれないが、非英語圏同士のコミュニケーションにおいてそうしたネイティブならではのニュアンスはあまり重要性を持たない。さらに英語＝「共通語」という意識を徹底させるならば、英語を学ぶさいに、英語の背景となった歴史や文化を学ぶことも必要ないといってしまうだろう。英語を特権化しても、その文化や考え方で特権化してしまっただけでは、英語を国語としない国の言葉と文化の重要性は失われてしまうからだ。寺島も指摘するとおり、「異文化理解」という名のもとに英語圏の文化を無批判なまま受け入れてしまうことは、ある種言葉を通じた洗脳状態に陥る危険を孕んでいる<sup>7</sup>。現在の一般英語教育の問題は、「国語」的発想ではなく「共通語」的発想をどこまで徹底できるか、言い換えれば英語は「目的」ではなく「手段」であることを明言できるかどうかにあるような気がする。

近年、歌詞を英語で歌う日本のロックバンドが増えている。英米圏が発展させてきた曲調にどうやって日本語の歌詞を載せていくか、それがこれまで日本のロックミュージックの課題だった。そして一部に英語のフレーズを取り入れることで、カッコよさを演出してきた。しかしそうした努力を止め、歌詞を英語で歌ってしまった場合、基本的に日本のロックミュージックは世界中のリスナーが楽しめるものとなる。たとえネイティブが日本人の発音の悪さをあげつらっても、英語圏および英語を学ぶ非英語圏の人々にとって、それは「わかる」音楽として十分楽しめる。実際、筆者にとってもスウェーデンのロックバンドが、スウェーデン語で歌うより英語で歌ってくれた方が取りつきやすい。こうしたグローバル化が英語習得の意義を裏付けるだろう。英語で歌うポピュラーミュー

ジックの傾向は、フランスでも起きている。フランス人は英語を知っていても話さないという、今でもどこかで囁かれる伝説とともに、自国の言葉に多大なプライドを持っていたフランスまで、そうした傾向に追随することを嘆く人もいる。しかし筆者は、そうした英語で歌うフレンチミュージックを別な観点から評価している。そこにはたとえ英語で歌っていても、明らかに英語圏の音楽とは違うフランスならではの個性と面白味が表れているからである。フランス語だという理由だけで敬遠してきた人の耳にもすんなり入り、かつやっぱりフランスだなという印象をもたらすことができたなら、リスナーを全世界に増やすことにつながるだろう。筆者は授業において、英語で歌うフランス音楽やフランス語で歌うフランス音楽を様々な聞かせるのだが、学生は日本とも英語圏とも違う面白さを音楽にも言葉にも見出している。こうした機会を与えると、学生がフランス語で歌う曲にも取りつきやすくなる。英語話者の特権性が失われてしまうと、少なからず損するのは英語圏のミュージシャンではないだろうか。英語圏ではない文化的背景が音楽に新鮮味と独自性を与える可能性が大きくあるからだ。筆者が学生にアンケートを取り、英語で歌っても日本のロックミュージックに日本らしさは残るかどうかと質問したところ、発音・考え方などの点で日本らしさは残ると答える学生と、残らないと答える学生の数は今このころ半々である。

英語で歌う日本のロックバンドとちょうど表裏一体の関係にあるのが、日本語で歌うK-popだろう。始めは英語で歌う曲が多かったが、次第に日本語の歌詞で歌うことで飛躍的にリスナーは増えたといえるだろう。母国語が日本語ならば、日本語で歌った曲は「わかる」だけでなく、外国人特有のアクセントに「面白さ」を見出したり、あるいは「心に響く」ものとなるからだ。こうした文化を入口にして逆に韓国語への関心も高まった。英語を「共通語」としてとらえるとき、英語は「目的」ではなく「手段」となり、英語の先に別の言語と文化を発見していくことにつながるだろう。英語＝「共通語」という認識を徹底させればさせるほど英語は「手段」として透明になり、その先に別の言語と文化の多様性を発見できるよう

になるのではないだろうか。実際には様々な要因でそう簡単にはいかないだろうが、このような希望なしには、日本語を母国語としている日本人とその文化の良さを他国の人たちに認めさせることは難しいのではないだろうか。英語学習中心主義は、突き詰めれば英語を「手段」にしてしまうにすぎない。言葉と文化の違う人と、ビジネスの付き合いならそれでもいいだろう。しかし心の通い合う友達になりたいならば相手の国の言葉と文化を知ろうとするのではないだろうか。

こうした観点から、実用性中心主義も考えることができる。大学の勉強を就職に必要、あるいは就職に有利であるという見地から学習することは、基本的に勉強を就職のための「手段」とみなすことである。しかしそれでは職業を人生の「目的」とみなすことができるのかといえば、一概にそう言い切れる人は多くないだろう。仕事も豊かな人生を送るための「手段」のひとつなのではないか、そう考えたとき大学の勉強をただ単に就職の「手段」にしてしまっはならない根拠があると考えられる。そして大学が果たすべき役割の大きさがあると考えられるのではないだろうか。大学教育は、学生が卒業後も精神的に豊かに人生を送る糧を与える場である必要があるだろう。そして大学での「学び」が単に何かの「手段」ではなく、「目的」たるところに「教養」の価値があるだろう。

筆者は、富山大学生涯学習部門で一般向け公開講座フランス語を五年間担当し、平成24年度は五講座を担当している。一般受講者に教えることを通じて、人はなぜフランス語を学ぶのか、人生を豊かにする「学び」の必要性について深く考えることとなった<sup>8</sup>。受講者の方々のほとんどは、フランス語を仕事上必要とするわけではない。フランス旅行をしたいという動機は大きいにしても、そうしばしばフランス旅行の機会があるわけではない。まったくフランスに行く機会がない方も多い。そのとき、フランス語を学ぶことは、何かのための「手段」というより、学ぶこと自体が「目的」としてとらえられるだろう。フランス語を学びたいから学ぶ。しいていえば自らの人生と日々の生活を豊かにするために学ぶ。こうした自分自身の精神的豊かさのための「学び」こそ「教養」

の意味を明らかにすると考えられる。「学び」の大切さ、あるいは「教養」の大切さは、往々にして学生時代より社会人になったときに痛感するものである。それゆえにこそ、学生に「学び」と「教養」の大切さを学生時代から教えることが必要ではないだろうか。大学が「学び」と「教養」の価値を保証することを怠ってはならないであろう。筆者は以上の観点から、フランス語が「学び」と「教養」の価値を保証する科目であると考えている。

外国語や外国文化を学ぶことで、同時に日本を別な角度から考える視点が得られる、これは多くの人の語るところである。筆者にとっても五年間のフランス留学は、日本社会を外側から考える絶好の機会であった。日本社会の内部にいたのでは気付かなかった特有の構造に気付くことになった。筆者の場合、日本人と日本社会の基盤となっている価値観について深く考えさせられた。その国の価値観は商品のモノの形に表れる。商品価値はその国の価値観に負うものである。そうでなければ消費者があるモノに対して価値を感じて購買するきっかけにならないからである。日本人あるいは日本社会の価値観は、「実質的価値」＋「付加価値」の組み合わせでできている。この価値観は、あらゆるモノの形に表れている。わかりやすい食べ物为例を取ると、お寿司、おにぎり、丼もの、カレーライスなどの形態に端的に表れている。すなわち、これらすべての食べ物は「ごはん」＋ $\alpha$ という形態を取り、「ごはん」が不変的「実質的価値」、 $+\alpha$ の部分が可変的な「付加価値」に当たる。パンの場合もアンパン、クリームパン、カレーパンなど、「パン」＋ $\alpha$ という基本的に同じ構造で成立している。至るところで商品がこうした形態を取るの、日本人の価値観の表現形態だからとしか考えられないだろう。この価値構造の目的は、「付加価値」の部分様々に取り替えて変化させることで、「実質的価値」を恒常的に存続させることにある。食べる側は、お寿司のネタを目当てに次々と食べているのだが、実はネタの変化は「ごはん」を食べ続けさせる「手段」だと考えられるのである。「実質的価値」＋「付加価値」という価値観において、「付加価値」は余分なものではなく「実質的価値」を安定的に存続さ

せる欠かせない部分である。それゆえ「実質的価値」のみを重要視して「付加価値」を取り除くと、返って「実質的価値」の存続を危うくしてしまう。ごはんだけ食べていれば実質的には大丈夫なはずだが、ごはんだけずっと食べ続けることはできないのだ。ごはんを食べ続けるためには、梅干しや海苔、納豆などといった $+\alpha$ がどうしても必要なのである。近年大流行した「食べるラー油」もごはんを食べ続ける新たな $+\alpha$ だったからであろう。この価値観は今でも日本社会で絶大な効果を持っている。別の例を挙げれば、人気アイドルグループのCD販売戦略にも表れている。CDにそのアイドルと握手できる券をつける、これは「音楽」＋ $\alpha$ と言いつけられるだろう。しかも買い手は「付加価値」の握手券欲しさに、同じCDを何枚も買ってしまふ。付加価値は「おとり」となり「実質的価値」を存続させる。小さい頃、「おまけ」欲しさにスナック菓子を食べきれないほど買ってしまつた経験のある人は多いはずだ。こうした商法が絶えずわが国で有効なのは、日本人の価値観の構造を表現しているからだと考えられるだろう。

この価値観を大学教育にも応用することができるのではないだろうか。実用性のみを重視し、専門科目、あるいは就職に有利な資格取得を目指した科目だけを学生に提供すれば、間違いなく学生は嫌になってしまい、むしろ学習効率は落ちていくと考えられるだろう。さらに実用的な科目であっても、そこに何らかの $+\alpha$ を付け加えなければ学習効果は落ちていくし、履修科目のなかに何らかの「付加価値」的科目が存在しないと、実質性の高い教科の学習性も落ちていくと考えられるのだ。この観点から教養科目フランス語を考えれば、明らかにカリキュラムの「実質的価値」を支える科目とはいえないかもしれないが、実質的科目の学習を存続させる「付加価値 $+\alpha$ 」の役割を十分果たす可能性を持った科目だと考えられる。「学び」のなかで「実用性」と「教養」の関係もこのような「実質的価値」＋「付加価値」の関係として考えていくことができるだろう。「付加価値」は単に余分なものではなく、「実質的価値」を存続させる重要な要因である。わが国において、第一外国語英語の習得を最優先して、英語を「実質的価値」としたい場合、他の第二外国語を駆逐してし

まったら、その結果は英語の一人勝ちではなく英語の凋落を招くのではないだろうか。現在においても理由は様々であるにせよ、大学の外国語教育が英語+ $\alpha$ の形を維持しているのは、それが日本の価値観に合ったものであるからではないだろうか。そうだとすれば、この+ $\alpha$ である第二外国語をもっと積極的に活用した方が英語学習にも都合が良いのではないだろうか。こうした発想が現在の外国語教育議論に欠けていると筆者には考えられる。

筆者はそれゆえ、日本人の価値観に基づいた観点から、教養科目フランス語を大学カリキュラムのなかにおける「付加価値+ $\alpha$ 」にとらえ、さらに授業内容も付加価値性の高いものを目指している。

#### IV 「フランス語」はフランス語だけ学ぶ科目なのか？

大学のカリキュラムにおいて科目名は通常「フランス語」である。「文法」「会話」といった区分があっても、基本的に語学の習得を目指す科目として位置づけられていることに変わりない。しかしほとんどのフランス語教員は、語学の授業だからといって語学だけを教えているわけではないだろう。息抜きのため、あるいは動機づけのため、文化や歴史のことを話題にするのが通常である。筆者は、平成24年度前期末に、受け持ちのクラスの学生を対象に大学が実施する授業アンケートとは異なる独自のアンケート調査を行った（回答者数144名、男40名・女104名）。それは授業の方向性を考えるためであり、さらに言えば、フランス語科目の付加価値性について学生がどうとらえているかを知るためであった。それに関わる質問は以下のようなものである。

- 1 フランス語の授業でフランス語学習中心のほうがいいですか？ それとも文化的事柄を含んでいた方がいいですか？ 含んでいた方が良い場合、どんな内容に関心がありますか？ また比率はどれぐらいが適当だと思いますか？
- 2 クラスの学生同士でペアあるいは全員と会話練習したりする機会は好きですか？ 好き、嫌い、いずれの場合も理由を教えてください。

3 一週間の授業スケジュールのなかで、他の科目と比べてフランス語の授業はどのような位置づけにありますか？ フランス語の授業に実用性と楽しさのどちらを求めますか？

4 一年後、フランス語を続けていると思いますか？ はい、いいえ、どちらの場合にも、理由をお願いいたします。また語学を長く続けるには、どんな動機が大きいですか？ 例：実用性、旅行、資格、趣味、文化的関心、友達、先生、など。

「フランス語の授業において文化的話題は必要か？」という問いに対して、ほとんどの学生(95%)が「必要」と答えている。「フランス語」の授業であっても、文化的話題は必要不可欠であることが明らかになった。それはやはりフランス語の履修動機に、フランス文化への関心が大きく影響しているからだと考えられる。前述の通り、衣食住、ライフスタイルの模範としてのフランス文化に対する関心の高さは、特に女性を中心に現代の日本で大きい。関心のある内容もほぼそれに関わる事柄であった。フランス語学習において文化的話題は、いわば「楽しみ」であり「付加価値」の役割を担うと考えられるだろう。また語学だけの授業は苦痛であると答える学生も多い。その点でも文化的話題が語学学習を助ける「付加価値」的要素になると考えられる。

次に「語学と文化的話題の比率はどれぐらいが適当か？」という問いに対して、学生はそれぞれ思い思いの割合を答えてくれた。語学の習得に重点を置く学生は語学：文化＝8：2と答え、語学が苦手な学生は語学：文化＝5：5と答えたが、全体的に見て理想的な比率は語学：文化＝7：3(30名の回答)あるいは6：4(21名の回答)だと答えている。この比率が、筆者の観点からすると、学生が無意識に考えている「実質的価値」：「付加価値」の比率だと考えられる。文化的内容を3割にするか4割にするか、学部やクラスによって違おうだろうが、筆者としては、語学の習得を最も効率化するためには、3割程度が適当かと考えている。

さらに学生に「フランス語の授業に実用性と楽しさのどちらを望んでいるか？」と質問したとこ

ろ、「楽しさ」を選ぶ学生が多かったが(49名)、どちらもと答えた学生も同じくらい多かった(43名)。両方合わせれば大多数の学生がフランス語に「楽しさ」を求めている、そこにフランス語課目の付加価値性を見出していると考えられる。フランス語は、英語と比べて名詞に性があり、さらに動詞がそれぞれの人称に応じて変化するので、多くの学生が難しいと感じる。語学を習得するという目的で、語学学習のみを推し進めると、学生はとたんにやる気を失っていく。実用十割では学習意欲そのものが失われる。しかし文化的話題のみ、あるいは楽しさばかりを追求した授業を学生が望んでいるわけでもないことが明らかになった。実用性がないとそれはそれで学習の意義と意欲をなくすと学生は答えている。これは学生のみならず、一般人を対象とした公開講座でも同じような反応が得られている。一度、公開講座においてフランス文化のみを取り上げた講座を開いてみたが、それだけでは優れた反応が得られなかった。またフランス語学習を続ける動機に関する質問では、実用性と楽しさの両方がないと続けられないと答える学生が多かった。

また学生に「一週間の授業スケジュールのなかでフランス語はどのような位置づけにありますか？」と質問したところ、「楽しさ」が圧倒的に多く、「癒し」「専門に関係のない気楽な授業」など、フランス語の授業が履修科目のなかにおいて「付加価値+ $\alpha$ 」として受けとられていることが明らかになった。もちろんこう答える学生が多いのは、筆者の授業方法がそうした方向性を取るからであるが、「付加価値」的な方向性を打ち出したとき、フランス語の履修者数が明らかに増加することは注目に値する。専門に必要な選択科目は、学生としてはできる限り履修したくない科目である。しかも面倒な語学の授業となれば敬遠するのが普通である。しかし学生は、単位取得の必要に迫られてだけ、あるいは実用性の高い科目のみを必ずしも履修したいわけではない。「付加価値」のある「楽しい」科目があれば、それを履修したいと考えるのだと実感している。そうやって一週間の授業スケジュールに気楽で楽しめる要素のある科目を組み入れることで、実質的な科目を頑張る元気を取り戻すのだろう。筆者は、日本の価値観の

構造から見て、三割の楽しみが七割の実用的知識の習得を効率化するのだと考えている。それゆえ筆者は、教養科目フランス語をカリキュラム全体において「付加価値+ $\alpha$ 」を与える科目としてとらえ、授業内容も三割から四割程度「付加価値+ $\alpha$ 」を組み込んだ内容にすることで、学生の実用的な科目履修を効率化させ、さらにフランス語の学習意欲を存続させようと努力している。

これは大学教育における「実用性」と「教養」の関係にも適応できるだろう。専門や資格試験に必要なでないからといって、教養的なものを削っていくと返って実用性も効果が上がらないのではなかろうか。それは大学卒業後においてもいえるだろう。ただ仕事のための人生は実用性のみの人生と同じだろう。人生のなかで「学び」の必要性は、こうした三割の「付加価値」によって七割の日常生活という「実質的価値」を生かすためにあると考えられるのではないだろうか。さらに外国語教育において、英語のみの外国語学習はむしろ非効率的な面があるのではないだろうか。第二外国語の学習が「付加価値」としてうまく取り入れられるならば、むしろ英語学習の意欲も高まるのではないだろうか。すなわち外国語教育を英語学習：第二外国語学習＝7：3の割合において学習するとき、最も日本人に適したものとなり、双方において学習効果が上がるのではないだろうか。

英語学習中心主義を拒否したり否定することは当面無意味である以上、むしろ付加価値性において第二外国語学習を見直し、大学だけでなく高等学校においても、第二外国語を取り入れていくことを考える必要があるのではないだろうか。日本人の価値観にあった学習方法としてとらえないかぎり、第二外国語の未来はいつまでたっても暗いままであるだろう。

#### V 付加価値性の高い授業、「楽しい」授業

筆者は以上のような観点から教養科目フランス語を、全体のカリキュラムの中で付加価値的科目としてとらえ、授業内容そのものにおいても付加価値性の高い内容を目指している。フランス語という科目の付加価値性とは、実はフランス語学習とは別のところに見出されるものである。すなわちフランス語自体を学ぶことと少々ずれたところ

に求められる。これは日本人の価値観＝「実質的価値」＋「付加価値」の構造において特徴的なことなのだ。商品の「おまけ」は、まさに「付加価値」であるが、それは商品とは違う性質のものでなければならない。「実質的価値」をなすキャラメル「おまけ」が、キャラメルとは違うおもちゃであり、アイドルグループのCDの「付加価値」は、「実質的価値」であるCDとは違う握手券であるのと同じ論理である。この「付加価値」の付け方が実は日本の特徴であり、日本製品が長らく世界市場で勝ち抜いてきた原因であったことに、筆者自身フランスにおいて気付いた。例えば筆者はフランス滞在時に、スーパーマーケットでの商品の売られ方に興味を持った。商品に「付加価値」を付けて販売することはどこの国でも行われているだろう。フランスで一番よく見られたのは、商品を二個買うと一個おまけについてくるという販売戦略であった。しかし日本人である筆者はこの商法に違和感を覚えた。一個付け加えるくらいなら、二個で値段を下げて欲しいと思った。おそらく日本人ならば多くの人が筆者と同じ感想を持つのではないだろうか。「付加価値」が「実質的価値」の一部を補強するものでは、日本人は魅力を感じない。ごはんを大盛りしてくれるだけでは、ごはんは進まないのである。ところが「実質的価値」とは別種類の「付加価値」を付け加えると、日本人の購買力はとたんに増すのである。そしてその別種類の「付加価値」を「目当て＝目的」として、「実質的価値」を「手段」と錯覚し、同じものをいくつでも購買してしまう。それゆえフランス語においても、「付加価値」はフランス語学習とは別種類の方が効果的である。

それゆえ科目名がフランス語であっても、フランス文化を教えることは効果的な「付加価値」の付け方だと考えられるだろう。筆者は授業において、衣食住や音楽、美術などにわたり様々な話題を学生に提供している。フランスの音楽を紹介してフランス語の曲を歌ったり、フランス流おしゃれを説明しフランスの服ブランドを紹介したり、フランス映画を観たり、フランス流のインテリアを解説し蚤の市で買った雑貨を披露したり、果ては学生に街のパン屋でフランスパンを探してきてもらい教室でみんなと一緒に食べたり、教室でク

レーブを焼いたりしている。こうしたことは、いずれの教員も多かれ少なかれ授業の息抜きや雑談として行っているものであるが、もっと積極的な価値を見出して授業に取り入れることが必要だと考えている。そんなことで学生の気を引くのは邪道である、あるいはそもそものフランス語学習がなおざりになるという意見の方も多くいらっしゃるだろう。しかし筆者は、日本の価値観を考察した結果、こうした方がフランス語は結果的に多くの履修者を獲得し、フランス語学習も効果を上げると考えている。

文化に関する話題は、フランス語と無関係のものではない<sup>9</sup>。むしろ言葉の背景の理解につながり、しいてはフランス語理解を助けるものである。言語と文化は切っても切り離せないという見地は、英語＝「共通語」と見なすとき無批判には受け入れられないが、フランス語学習にとって最大の切り札となる。『ヨーロッパ言語共通参照枠』においても、こうした言語を通じた文化の相互理解の重要性が語られている<sup>10</sup>。ただこうした文化的な内容を「付加価値＋α」とするためには、学生にとって「楽しい」ものでなければならない。概説に陥ったり、学生の関心事を考慮しないプレゼンテーションであるならば、文化的話題は「付加価値」として学生を引き付ける価値とはならないだろう。

インターネットの普及によって、世界中の情報が距離と時間といった壁なしに、手軽に入手できるようになった。富山という地方都市に住みながら、インターネットで24時間見られる国際フランス語放送TV5を視聴していれば、フランス語圏に住む人々と情報面での差はほとんど感じない。しかしそれは筆者が五年間のフランス滞在を通して、フランスとヨーロッパの社会的背景を理解しているからであり、情報の入手する仕方やその情報の価値を知っているからに他ならない。フランス語放送を通じて日々入手する情報は、日本で流通する情報と異なり、おそらく英語を通じて入手する情報とも異なるだろう<sup>11</sup>。筆者は日本のなかにおいて、鎖国的といってもいいような情報の壁を感じる時がある。いくら世界中の情報が入手できる環境であっても、情報を検索するキーワードを知らなければ情報は事実上存在しないに等しい。

わが国で人の目にするあらゆる場所が、消費に導くキーワードで塗り固められ、それをインターネットで検索するように人々を誘導し、最終的に何かの購買に結びつけられているならば、インターネットは自主的に何かを知る手がかりとはならない。それゆえ筆者は、フランス語を通して得られたキーワードを学生に与えるように努力している。消費の誘導を狙ったキーワードで固められた日本の鎖国的な情報の壁を越えられるように、そしてそのキーワードによって世界を広く見る見方を自分で手に入れられるよう促すためである<sup>12</sup>。こうしたインターネットを通じて見えてくる世界像は、言語そのものが世界の見方を伝えるものであることを端的に表しているだろう。日本語を通じて得られる世界と、英語を通じて得られる世界と、フランス語で得られる世界は明らかに違っているのである。東日本大震災のさいに、フランスのテレビ局の報道を毎日視聴していたが、それは明らかに日本の報道とは異なっていた。このようにフランス語とフランス文化の学習を通して、学生自身が複眼的な世界像を作り上げる手助けができれば、これも重要な「付加価値」と言えるだろう<sup>13</sup>。

フランス語学習自体においても「付加価値」と「楽しさ」を作り出すことは可能である。初修の第二外国語学習は、文法と単語の習得に多くの時間を割かなければならない。しかもフランス語の場合、英語と文法的構造は似ているため、英語をそれまで学んできたという前提のもと一通りの文法を一年間で教えようとする。一年間30回で一通りの文法を教えようとするれば、ほとんどが文法の学習となってしまう。それは大変学生にとって無味乾燥かつ苦痛なもので、単位を取得してもその後学習を続ける気にはならない。どんな語学学習でも、ペアワークやグループワークの有効性と大切さは認められている。実際に人と会話することで、発音や文型を身につけることができるからだ。「ペアワークやグループワークが好きか？」という質問に対して、学生の圧倒的多数が好きだと答えている(101名)。しかもその理由を見ると、フランス語学習の成果とは別なところに学生は「付加価値＋α」を見出していることが理解される。筆者は隣り同士のペアワークだけでなく、くじ引きを用いたペアワーク、さらにクラス全員

が全員とお見合い方式で会話して、空欄を埋めていく方法などをいつも実践している。そのとき多くの学生が「楽しい」と答え、その理由として「いろいろな人と話せて、仲が良くなれる」を挙げる。この方法は特に一年生に有効である。大学に入学し友人が少ない状況で、自ら話しかけていくより、授業で会話する機会があれば、知り合う良い機会となり、大学生活に溶け込みやすくなるからである。この効果は、フランス語学習そのものとは言い難く、まさに「付加価値」と言えるものだが、言葉を通して人とコミュニケーションを図るという意味では本来の語学学習の意義を果たしていると考えられるだろう。フランス語学習の目的は、フランス語話者と会話することにあるだけでなく、フランス語学習を通じてクラスの仲間とコミュニケーションすることにもあると考えてよいのではないか<sup>14</sup>。

筆者は文法学習において小テストを繰り返して行い、同じテストでも8割取れるまで何度も繰り返しやらせている。これは少人数の場合非常に有効だが、大人数の場合、採点する教員の負担が重くなり大変なのだが、これを丹念にやると学生の文法習得率が上がるだけでなく、学生との個別的对話という「付加価値＋α」が生まれる。そうした機会がなければ大人数のクラスで一人ひとりの学生の名前と顔を覚えていくことは教員にとって難しい。学生も、教員と互いに認知し合う機会がなければ、授業に積極的に参加している実感も、しようという意欲も持てないであろう。

「一年後、フランス語を続けていると思いますか？」という質問に、「はい」(72名)、「いいえ」(43名)と学生は答えた。半期という短い期間で半数以上が「はい」と答えたことは、大きな成果だと考えている。第二外国語フランス語に与えられた短い履修期間で、最大の効果を得るためには、やはり「付加価値」の高い授業が有効だと考えられはしないだろうか。実際に一年後にフランス語学習を続けている学生はかなり少ないだろう。現在の大学のカリキュラムでは、この72名が一年後も学び続けられる受け皿はあまりに小さい。

## おわりに 「7：3理論」の「3」としての フランス語教育

近年筆者は、前期の講義が始まってしばらく間、学生の教員に対する不信感を強く感じる。それは年々強まっている気さえする。その不信感を払拭するために、多くの時間が必要になってきている。学生と担当教員の信頼関係の構築がますます難しくなっていると感じられる。しかしこうした不信感を払拭することなくして、いかなる知識の習得も有効ではないだろう。「信頼感」こそ、授業における最大の「付加価値+ $\alpha$ 」だと考えられるからである。なぜ学生の不信感が増しているのか考えたとき、学生が息抜きもできないまま「実用性」の高いものを半強制的に選ばされているからのように感じられる。筆者は、大学のカリキュラムのなかで、学生にとって「楽しく」「就職には響かない気楽な」「癒しの」科目として教養科目フランス語があるとしたならば、それはフランス語にとって最高の存在意義であると考えている。その授業が「楽しい」と感じてくれたならば、学生は学習を自主的に続けるであろうし、たとえ中断したとしても卒業後のいつかにおいて再開する可能性が残されている。これこそ大学教育のなかで「教養」が持つ意義であり、人生のなかで「学び」が持つ意義ではないだろうか。大学のカリキュラムを編成する方々に申し上げたいのは、日本の価値観の構造から見て、「付加価値」のコスト削減ばかり行くと、「実質的価値」の有効な存続まで妨げられるということである。そして実質的な成果を期待したいならば魅力的な「付加価値」が必ず必要であるということである。

### <注>

- 1 大木充・西山教行編『マルチ言語宣言 なぜ英語以外の外国語を学ぶのか』、京都大学学術出版、2011年、p.197。
- 2 寺島隆吉『『英語一極化』に抗してフランス語教師に何が出来るか』、「Revue japonaise de didactique du français vol.7, no 2 études françaises et francophones」、日本フランス語教育学会、2012、pp.85-109。平川祐弘『日本語は生きのびるか 米中日の文化的三角関係』、河出書房新社、2010年。
- 3 詳しくはジャン＝ブノワ&ジュリー・バロウ著、立

花英裕監修、立花ゆかり訳『フランス語のはなし もうひとつの国際共通語』（大修館書店、2008年）を参照されたい。

- 4 水村美苗『日本語が減びるときー英語の世紀の中で』、筑摩書房、2008年、p.63。氏の滞米経験を描いた『私小説from left to right』（ちくま文庫、2009年）は、英語ができれば国際社会に通用するという考え方の安易さや、英語を母国語にしない国民の英語に対する複雑な心理を非常にうまく描き出している。
- 5 詳しくは前掲書『マルチ言語宣言』、「はじめに『ヨーロッパ言語共通参照枠』（CEFR）に学ぶ外国語学習の意義」、pp.3-19を参照されたい。
- 6 日本フランス語フランス文学会・日本フランス語教育学会・駐日フランス大使館共同派遣2006年度「フランス・スタージュ」、2006年7月31日から8月24日まで、フランス・フランシュ＝コンテ大学ブザンソン応用言語学センターにて。
- 7 前掲の寺島『『英語一極化』に抗してフランス語教師に何が出来るか』参照。
- 8 清水まさ志「生涯教育のなかのフランス語教育ーひとつの実践報告ー」、「富山大学地域連携推進機構生涯学習部門 年報」第13巻、富山大学地域連携推進機構生涯学習部門、2011年、pp.15-22、および清水まさ志「平成23年度公開講座フランス語関連講座概要ー安価で良質な外国語教育を目指してー」、「富山大学地域連携推進機構 生涯学習部門 年報」第14巻、富山大学地域連携推進機構生涯学習部門、2012年、pp.12-15を参照されたい。
- 9 文化学習と言語の関係に関して、三浦信孝・西山教行編『現代フランス社会を知るための62章』（明石書店、2010年）の「まえがき」が大変参考になった。
- 10 前掲書『マルチ言語宣言』、「はじめに『ヨーロッパ言語共通参照枠』（CEFR）に学ぶ外国語学習の意義」、pp.3-19を参照。
- 11 アメリカのメディアに頼る危険性は、前掲の寺島『『英語一極化』に抗してフランス語教師に何が出来るか』、pp.91-93を参照した。寺島のいうように、英語を学ぶことが日本を米国のようにしないためであるならば、それは大変皮肉な学習である。
- 12 佐々木倫子・細川英雄・砂川裕一・川上郁雄・門倉正美・牲川波都季編『変貌する言語教育 多言語・多文化社会のリテラシーとは何か』（くろしお出版、2007年、p.192）において、砂川裕一のリテラシーに関する次のような定義が参考になった。「わからないことがあれば人に聞くとか、コンピューターで検索するとか、対話でわからない時にどういう意味かを聞き返すとかいった、ある設定された状況のなかで生じたズレや問題を解決できるだけの実践力・対応力、つまり『応接力』が欲しい。言語教育の観点から言えば、そうした力を、学習言語を媒介として獲得して、さまざまな形で対応できるようになって

いくということをめざすんだと思います」

- 3 前掲書『日本語は生きのびるか』において、平川は三つ以上の文化に依拠する「三点測量」を語る。「私は文化の三点測量のできるエリートの形成が世界的にますます必要とされると信じている。点と点を結ぶと線になるが、外国語と母語を結ぶと知識がばらばらの点でなく線となる。第二外国語が加わると知識は面となり、さらに第三外国語が加わると見方が立体的になる。」(p.190) 本書では日本のエリート像が江戸時代までの「和魂漢才」から明治期以降「和魂洋才」に転換しえた点も詳しく述べられていて大変参考になった。筆者の観点でいえば、「和魂漢才」にせよ「和魂洋才」にせよ、「和魂」+ $\alpha$ という形で日本人の価値観が表れているのではないだろうか。それゆえいまだに言語的に日本語+英語という形にとらわれやすいのだろう。平川は、明治期の夏目漱石や森鷗外が「和魂漢才」+「洋才」の形を取って真に知的巨人となった例を挙げ、また日本の近代化が陥った戦争という負の側面も考え、単なる「和魂洋才」ではなく、「和魂洋才」+ $\alpha$ の形を主張しているのだろう。それゆえ現代のエリート像が言語的には「日本語+英語」+ $\alpha$ となるよう要請するのだろう。
- 4 岩田好司「フランス語教育と『共同学習』ー『学びの共同体』づくりー」、「Revue japonaise de didactique du français vol.6, no 1 études diactiques」、日本フランス語教育学会、2011、pp.57-72は、こうした方面からの研究である。